

令和6年度高校優秀卒業設計審査会 全体講評

今年度の応募数は26作品で、昨年度の22作品から4作品増え過去5年間で最も多かった。審査会では、大学教員5名、建築家1名、高専教員1名、建築団体代表者3名による総勢10名の委員により審査が実施された。

応募作品は、建物の用途、立地、素材、デザイン趣向などに地域性が感じられ、高校生たち一人一人の地域に対する思いを感じることができた。昨今の、図面のCAD化、BIM化などの影響を受けて、高校ごとの設計ツールの活用方法、指導方法に多様性が見られる中で、一律に評価する事の難しさが感じられた。審査の議論は、建物自体の設計のみならず、周辺環境への影響や、作図、表現方法など多岐にわたり、結論に至るまでには多くの時間を費やすこととなった。

昨年度同様に事前審査とオンライン会議による審査会となった。具体的には、各審査員に作品の電子データを事前に配布し、約10日間の選考期間の中で最優秀賞・優秀賞候補をそれぞれ選定し、集計した投票結果をもとに点数化し、2月13日のオンライン会議にて厳正なる審議を行い、最優秀賞6作品、優秀賞8作品、佳作3作品の合計17作品を優秀卒業設計作品に選定した。

敷地周辺の調査に基づいた、地域性を感じる提案が高く評価される傾向にあった。一方で、平面図、立面図、断面図にもっと周辺の状況を書き込むと、提案の主旨がよりよく伝わるのではないかという意見も多くあった。提案の大胆さや独自性を求めるあまり、周囲との調和に懸念が見られる案や、反対に、堅実だが手堅くまとめすぎる案もあり、どのように評価するか難しい点があったが、若い高校生の情熱とエネルギーを積極的に評価することとなった。このように建築には多様な評価軸があるので一律に評価することは難しい。この設計審査会を通じて、高校の枠を超え、相互に影響を受けあう事ができれば、今後の発展が期待できるのではないかと思われる。

建築は、学ぶにはあまりにも広く深いテーマなので、短い高校の3年間で、高校生たちは何を最初に学んだらよいか、先生方は何を伝えるべきか、とても難しいのではないかと思われる。高校生も先生も大変な思いで卒業設計の完成に至ったと思われるが、これは建築という厳しくも楽しい大きな世界の最初の扉にしか過ぎない。惜しくも受賞の評価を得られなかった人も、落胆せずに、長い時間をかけて、楽しく建築を学び続けて欲しいと思う。

令和7年2月13日

日本建築学会中国支部設計審査委員会

高校優秀卒業設計審査部会主査 土井一秀